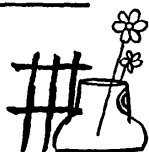


巻 頭 言



ニューメディアの普及と情報処理技術

鈴木 良 夫†



昨年打ち上げられた通信衛星に続いて、今年1月には実用放送衛星が打ち上げられ、5月12日からは宇宙からのテレビジョンの放送が開始された。当面の主目的は難視聴地域解消となっているが、高品質の映像と音声による番組は一般の人々に解り易いニューメディアとして認識されるであろうし、今後の発展が期待される。

一方、電電公社の民営化と電気通信分野への競争原理の導入を目指す法律も間もなく制定されようとしており、いわゆるVANに相当する第二種電気通信事業者ばかりでなく、第二電電公社ともいわれる第一種電気通信事業者としても多くの企業体が参入の意向を表明していると伝えられる。回線の自由化につづくこの電気通信事業の自由化の動きは、CATVやINSなど通信メディアの充実や、キャプテン・システムを初めとする新しいサービスの登場を一層促進し、情報処理と電気通信との結合から生まれる各種のニューメディアの発展を急速に推進する原動力となることであろう。

これらの新しいメディアの利用は、従来の情報処理技術の利用が企業や行政機関における業務用として限られた範囲の人々を対象としてきたのとは異なり、少なくとも将来においては広く日常の市民生活、家庭生活にとり入れられることになると想定される点で、今迄に経験したことのない問題を情報処理の分野に提起しているように思われる。

放送やレコードといった電気通信技術を基盤とするマス・メディアでは、その普及を進めるためにもまず方式の標準化が何らかの形で実現される。もちろん標準の定められるまでも激しい議論と競争があるにしても、情報の供給者も装置の製造者もその標準の枠の中で最良のものを提供するための競争をくり広げ、その結果として価格性能比の優れた製品が供給されている。標準制定の際の誤まった選択が技術の進歩に障害

となるおそれはあるものの、標準化は一般の利用者にとっては有利な場合が多い。

一方個別通信の分野では、通常の電話の場合情報のやりとりは利用者である人間の判断に依存することにより、ダイヤルと数種の信号音という簡単な通信規約を用いて広汎な普及に成功したといつてよからう。

これらに比して情報処理の分野で最初で大衆化の道を歩み始めたパーソナル・コンピュータについてみても、そこで用いられるCPUもO/Sも多種多様でしかも急速な進歩を続けている。また、たとえ広く普及しているO/Sを用いるとしても、何らかの形で各製造業者の独自性を出すことが、商品戦略の上からも不可欠となっている実状にある。

半導体、磁気記録、光ファイバなどを中心とする素子・材料技術の進歩を背景に、通信及び情報処理に用いるハードウェアの発展は目覚ましく、コンピュータを例にとっても、超高速コンピュータからパーソナル・コンピュータに至るまで、その性能の向上と価格性能比の改善は眼をみはるばかりである。

しかしソフトウェアの生産性については、ソフトウェア工学の諸手法の地道な実践による改善が成果を上げてはいるものの、現実の問題として決して充分ではないことも認めざるを得ない。

供給側の立場からみたこの問題の解決策は、できる限り汎用性が高く、しかも一方で個々の利用者にとってその独自の用途に適するよう特殊化のし易いシステムを開発することであろう。

その際、社会的な要請と技術の進歩によって実現の時期が迫っているニューメディアの普及と、情報処理の大衆化とに備えて、何が各供給者の協力によって標準化され、何が自由な競争によって積極的な進歩ははかれるべきかについて、広く活発な議論が期待される。

(昭和59年4月25日)

† 本会理事 日本アイ・ビー・エム(株)

